

作詞少女

《番外編》

作詞のプロになる方法

仰木日向

イラスト

まつだひかり



番外編『作詞のプロになる方法』

「ここに来るなんて珍しいじゃねえかジュンちゃん。何年ぶりだ？」

「はは、そうだね。私も、シーちゃんがここにいるのを見たの、久しぶり」

「あがれよ。茶でも飲んでつてくれ」

「うん。お邪魔します」

高校3年の3学期、高校生活も残すところあと1ヶ月となった2月下旬。旧友の家を訪ね、足元の凍結に気をつけながら私は、ドクドクと脈打つバイクのエンジンを停める。

白い息を吐く私——喜多村潤奈と、相棒のTZRストロボ。シーちゃん家の駐車場で大人しく眠っている真っ赤なブンブン丸を見つつ、うちの子も並べる。

伊佐坂の家に来るのは、中1のとき——あの事件のとき以来だった。いまとなつてはSiEというペンネームで作詞家をしているシーちゃん……伊佐坂詩文と、ほんの短い間だけ一緒に遊んだこの屋敷。あの頃めちゃくちゃ長いと思つていた廊下は、私の身長が伸びたぶん視点が上がったからか、少しだけスケールダウンしているように感じる。とはいえ、それを差し引いてもこの屋敷はやはり大きい。

「あー、懐かしい！ この廊下！ この家いいよねえ。なんか時代劇みたいでさ」

「そうか？ アタシからすりやこれがデフォルトだからな。どう良いのかはわかりにくいが。しかしどうい風吹き回したジュンちゃん？ まだガッコーあんだろ？ アタシはもう行かねーが時期的にはまだ3年の3学期じゃなかったっけ？ 平日の昼間だろ今日は？」

「うん。学校はサボってきた」

「アハハ、おいおい、いいのかよ？ センセーに怒られちゃうぜ？」

「はは！ いまさら！ つていふかシーちゃんも学校サボってんじゃん」

「アタシはもう引退したんだよ。形だけでも卒業すりや服役完了だからな」

「服役ねえ。そういうええばそんなこと言ってたね」

シーちゃんはゆつたりと、とても穏やかな様子で私を迎えてくれる。いかにもラフなハーフパンツと大きめのシャツには、一部に和柄があしらってあった。いつかシーちゃんが教えてくれた……これはなんていう模様だっけ……そう、青海波。伊佐坂の家を嫌っているシーちゃんではあるけど、でもやつぱり根元のところではしつかり伊佐坂なんだろうなっていう感じが、こういう些細な部分からちよつとだけ感じられる。

中庭がガラス引き戸越しに見える広間には、掘りゴタツ。どうやらミカンを食べていたらしい食ベカスののつた机。ストープの上のヤカンを取り、アツアツのお茶を注いでくれつつシーちゃんは、コタツであつたまれと言つた。外の寒さですつかり冷えた体には、コタツが一層あ

りがない。

「……シーちゃんさ、卒業したらどうするの？ 作詞家でやってくんだよね？」

「なあんだ、何の用事かと思えば進路相談かジュンちゃん？ アタシの話なんか参考にならねえと思うがな？」

「うん。まあ、シーちゃんと私じゃ生き方が丸ごと違うからアレだけど、シーちゃんの話は聞いておきたくて」

「ジュンちゃんはあるだろ？ 実家のバイク屋に就職するんじゃないっけ？」

「まあね。でも、他にもちよつと考えてることあつてさ。シーちゃんは具体的に、どうするの？」

「アタシは、ちよつとアメリカに行つてくるよ。目的は色々だが、10年くらい」

「10年も？」

「外国語をネイティブレベルで使えるようになるには、それくらいかかるんじゃないかと思つてな。いまのところ、しばらく帰つてくるつもりはない」

「……なるほど」

もともと、シーちゃんはモノが違う。この子を一般的なモノサシで測つても何の意味もない。それはもう十分知つてるけど、やはりわけのわからない進路に進もうとしてるし、それで当然といった様子の子の子と話すとき、いま私が悩んでいる進路の話があまりにも月並みで、あ

りふれたパターンのうちの一つでしかないと感じる。

「ジュンちゃんは どうするんだ？」

「私？ 私は……」

「キタムラモーターズは、やつぱ解散か？」

「……うん。バンドって結構ムツカシイこと多くてね」

「良いバンドだったのにな、モーターズ」

「ふは、シーちゃんって案外身内評価甘いよね？」

「そんなことはねーよ。ものの良し悪しについては絶対に正直だ。本気で良いと思わなきゃ良いとは言わねえ」

「そつか。そういえば、そういうポリシーだったね」

「おう」

「シーちゃん、私さ、作詞家になろうと思うんだ」

「……ほお、なんでまた？」

私は、本題に入る。私が5年ぶりにここに来たのは、この話をするためだから。他の誰に相談するより、一番確かだと思つて。

「……シンガーソングライターでもいいんだけどね。でも私、歌詞書きたくて歌ってるみたい

なとこあるから。一番やりたいことに特化してみようかなって」

「モーターズ、良いバンドじゃねえか。あのままバンドでプロを目指すのも悪くないと思うんだけどな？」

「はは、それはシーちゃんが見る目あるからだよ。シーちゃんにウケてるようじゃダメなんだ」

「あははは！なるほどお、そりゃあ一理あるな。しかしそこに賭けてみるのも一興だとは思うけどな？」

「もし私一人でやってるならそうだね。そういうギャンブルもありだと思う。でも、バンドってチームだから」

「あー。なるほど。少しガッテンがいった」

「私が賭けていいのは、私の人生だけ。だから、一人でやれるものを選ぶことにしたんだ」

「そういうとこジyunちゃんだよなあ。責任感じ過ぎなんだよなあ、なにかと」

「違うよ。背負える責任と背負えない責任をちゃんと分けて考えるようになったんだ。つていうかこれは、シーちゃんが教えてくれたことじゃない」

「……そんなこともあったっけねえ」

「身の程わきまえてるんだ。私が救えるのは、せいぜい私自身と家族を一人か二人だよ。それ以上のことを出来るとは思わない」

「自分の面倒を見れるだけでも上等だと思うけどな。世の中には、それすら出来てない人間が大勢いる。家族の面倒を見れるならそれだけで十分な実力者だと、アタシは思うぞ。どんな

生き方だったとしても」

「弟いるから、長女としてやっぱそういう責任感みたいなのもあるのかもね。しつかりしてなきや、みたいなき」

「まあ、ジュンちゃんくらい真面目に考えて決めたことなら、それでいいじゃねえか。やってみるよ作詞家。……っていうか、やるのはもう決定してるんだろ？ 他人に背中を押されなきややれないってんなら最初からやめておけてアタシは言うし、ジュンちゃんならアタシがそう言うってわかってるだろ？」

「うん。やるのは決定してるんだ。だから、ここからは甘ったれな私の話。シーちゃん、少しのヒントでいいから、作詞家になる方法を教えて欲しい」

「……………」

———言った。平静を装ってはいるけど、シーちゃんにこの質問をすることに私は、実はかなりビビッている。なにせ相手はシーちゃんだ。おそらく私より私のことをわかっている、とてもじゃないけど計り知れないこの子に、何かを聞くというのはただそれだけでピリッと背筋が冷える。

「……………作詞家になる方法を、ネットで色々見てるんだけどさ。ないんだ、まともな情報。

一応それらしいのとかはあるんだけど……肝心なことが書いてない。入口がどこにあるのか全然わからないんだ」

「まあ、そういう感じだろうな」

「シーちゃんは、どうやって作詞家になったの？ ……って、言っても、伊佐坂家はもともと音楽業界と関わりが深いんだもんね。そこから？」

「おっと、気を付けろよジュンちゃん、アタシが伊佐坂の力を使おうだなんてそんなくだけたねーことをすると思うのか？ バカにしちゃいけない。アタシはアタシの独力で作詞家になったし、伊佐坂の力を一つも借りたくないからこそSIEってペンネームでやってんだ」

「……そうだね、ごめん。シーちゃんが伊佐坂を名乗るわけないもんね」

「もちろんだ」

「……やっぱ、自分で考えろ、だよ」

「ん？ なんだそれは？ アタシがそう言いそうってことか？」

「あ、うん」

「はは。そんなことは思わねえよ。特にジュンちゃんくらい自分でモノを考える人間に、それ以上自分で考えろと言うのはなんの足しにもならねえ。……とはいえ、どうしたもんかな。アタシのやり方が必ずしもジュンちゃんにとつて有効なやり方とは限らない。……っていうのは踏まえつつだがまあ、手がかりくらいはあつた方がいいのかもな」

「シーちゃん……？」

掘りゴタツから立ち上がると、シーちゃんは猫のようにグウーツと背伸びをして、シャンと芯の通った姿勢で身をひるがえし、冷蔵庫からみたらし団子を持ってくる。

……その一連の動きに、私はなんとなく見惚れる。細かい所作が日本舞踊のように雅やかで、それはまさに、初めて会った頃のシーちゃんを彷彿させる。やっぱりこういうところには残ってるんだなと思ったりして、今と昔で変わっていないところをついつい探してしまう。

「ほら、タレをたつぷりつけて食え。旨いぞ。……さてと、作詞家になる方法についてだ。アシの踏んだ段取りの話だから、これが必ずしも絶対的なルートってわけではないってことは、改めての確認ではあるが一応わきまえてくれ」

「うん」

シーちゃんは、みたらし団子の串を握り、タレをたつぷりつけて食べる。そういえば、ここに来ると大体いつも、みたらし団子を出してもらってる気がする。

「好きな作曲家はいるか？ 作詞作曲じゃなく、作曲のみの人物だ」

「え。ああ、えーつと、いるね」

「まずはそれを5人リストアップする。そして、その全員に連絡。『あなたの作る曲が好きなので作詞をさせて欲しい。コンペの仮詞をやらせてくれないか』と交渉する」

「え、おお。なるほど……」

「その作曲家に懇意な作詞家がどれくらいいるかはわからないが、コンペ参加に積極的なタイプの作曲家なら、作詞家も多いに越したことはないと思ってる可能性がある。特に自分の得意

分野の傾向をハッキリと伝えれば、この曲はこの仮詞さんに頼もう、とかそういう人選で自分にお鉢が回って行くこともある」

「そうなんだ……?」

「大事なポイントがいくつかあったが、わかるか? まずは『自分の好きな作曲家であること』。もう一つは『自分の作詞の得意傾向を明示することだ。もちろん、それにふさわしい実際の作詞資料を添付するのも忘れずにな。作詞資料については、ジュンちゃんのケースだと自分の書いた作詞作曲があるだろう? あれでオツケだ。ここで曲がないので作詞資料もありませんとかいうやつについては、作曲から始めるテキスト作詞家めとしか言いようがないな」

「あはは、そのへんやつばシーちゃんだねえ。手厳しい」

「アタシはジュンちゃんが作詞家をやるのには賛成だよ。曲の仕組みをわかっている作詞家になるだろうからな。なにせ作詞家って仕事は舐められてるんだ。曲の構造をまるで理解してないアホウどもが、放送業界だったり脚本業界だったりジャーナリスト業界だったりといった物書きエリアから参入してきては、何一つわかってねえクソ歌詞を曲にあてがって台無しにしつつ、同じく何もわかってねえクズプロデューサーと結託して業界に我が物面で居座る。あの様子を見ると本当に吐き気がする。……もちろん、別にどこの業界出身のやつが作詞をやっても、それはかまわねえよ。ただし、やるならちゃんと音楽として作詞をやれって話だ」

この話は、シーちゃんから直接聞いたこともある。実際にシーちゃんが激しく争ったプロ

デューサーの話とか、壮絶だった。作詞業界の全部がそうってわけじゃないだろうけど、シーちゃんが見たその現場は実際の一つなんだろうと思う。

「でだ。仮詞がコンペに通ろうが通るまいが、作曲家とウマが合えばまたよろしくってことになる。そしたら、あとはその繰り返しだ。なにせ作詞家がノンキャリアでいきなり商業案件を取るのにはほぼ不可能に近い。偶然やラッキーでもないかぎりはな。だから、まずはこういうところからだ。でもって、仮詞というやつは案外、そのまま採用されてリリースということもままある。このパターンで作詞デビューしたってケースは非常に多い」

「そうなんだ？ 仮詞って、使い捨てなのか」と

「このままの方がいいだろうと思わせるくらいの歌詞を書いてりゃ、仮詞をそのまま採用した方がリスクは少ないんだよ。本歌詞用に別テイクを作るとなると、作詞家を選ぶという責任が発生するからな」

「なるほどね」

「実際、そういう形でアタシの最初の歌詞は採用され、リリースされた。もともとは仮詞だったんだ。そして、プロとして曲がリリースされたらあとは動きやすい。その曲を携えて音楽関係者の特に自分が良いと思う企業や人物に会いに行く。企業ってのは例えば音楽制作会社だ。音楽制作会社がなんなのか知らないなら、それについてはググれ。作詞家を抱えてる音楽制作会社ならほぼ確実に作詞のコンペも持つてるから、『こういう歌詞を書くが、合いそうなコンペや案件があったら紹介してくれ』って具合に話をつける。所属作家じゃなくても、能力さえ

あるなら単発案件で関わることは普通に出来る。気になる作曲家がいたらそこにも同じように連絡だ。……ここにも重要なポイントがあつたな。『合いそうなのがあつたら』というこの部分だ」

「へえ、どう大事なの？」

「『どんなものでも対応します』とか言わないということだ。アタシの方向性はこれで、これに合うものを紹介してくれと最初から言う。アタシが例えばワサビだったとして、どんな料理にもで合うってわけじゃないだろう？ もしオムライスを作ろうって時だったなら、アタシは完全に場違いだ。でも逆に、寿司を作ろうとか、蕎麦を作ろうとかって時ならアタシはベストマッチだ。そんな風に、得意な分野にまずは全力で振り切っていく」

「なるほど。でもそれってどうだろ？ 色々対応出来る方がいいんじゃない？」

「それはジリ貧の発想だ。色々出来る方がいいってのは、実際はとしてはそう。というか、アタシは普通になんでも出来る。出来るとしてもなんだよ。大事なのは、『自分の得意分野を明確にしている』というこの部分だ。そりゃプロなんだしどんな料理も作れるさ。その中で特に最高のポテンシャルを発揮出来るのはここだ、アタシの傾向はこうだと専門分野を絞ること、そういう傾向のものを引き寄せやすくなる」

「おお、そういうこと」

「実際いくつかりリース曲が増えてきたときに、5曲全部バラバラなやつと5曲全部同系統で筋が通ってるの、どっちの方がわかりやすいかって話だ。アタシは赤色だと伝えておけば、赤色が光るシーンにアタシは呼ばれる。そして重要なのは『その結果は大体良い結果になる』と

いう部分だ」

「え、なんで？」

「得意分野ばかりやってりや良い結果が並ぶのも当然だろ？ 得意なんだから。野球が得意なやつが水泳もサッカーもとやるのより、野球やりやいいんだよ試合。そして、その結果の良さでまた別の人間が寄ってくる。野球が得意なあなたに出て欲しい試合がある、つてな具合にな。その時に野球じゃないものを頼まれたなら、それをやってみるのも一興だ」

「……なるほど」

「そうなつてくるとあとは簡単だ。一生懸命良い歌詞を書きやいい。仕事が仕事を呼んでくるし、無理も嘘もないやり方だから仕事のスピードも快速、それでいて出来もいい。すべてがクリアーだ。その状況までいってようやく、一人前のプロ作詞家の一人と言っていいいんじゃねえか？」

「そういうことなんだね」

シーちゃんの言う筋書きは、たしかに現実的で的を射ている。私でもそのプロセスの想像がつく。……でも、これはシーちゃんが言うほど簡単なものじゃない気がする。

「他に質問は？ ジュンちゃんなら大サービスだ、なんでも答えるぜ」

「……ほんとりとめのないこと聞いてもいい？」

「おう。遠慮なくなんでもどーぞ」

「シーちゃんのその度胸を、私はどうやれば手に入れられると思う？」
「……………」

そうなんだ。結局はそこなんだ。シーちゃんの筋書きは、度胸さえあれば実行出来ることばかりだ。好きな作曲家に連絡を取るのも度胸がいるし、絶対に良い歌詞が書けると言い切れるその自信はもはや私には狂気だ。たしかに、シーちゃんくらい自信と実力があればパワープレイでどんどん道を拓いていくことは出来るだろう。でも、私はシーちゃんじゃない。作詞の実力だって勉強中だし、実力不足な自分をプロの作曲家にジャッジされるのは、危険の方が多い。下手だと思われたらその時点でチャンスを失う。もしなんだかんだでリリースにこじつけたとしても、その一曲を携えて次を掴むっていうのをどれくらい堂々とやれるのか。シーちゃんの理屈は全部、圧倒的自信と度胸と、本当に持っている実力に裏付けされたものだ。

「度胸のつけかたかー。それは、ある程度生まれつきかもなあ」

「……………そう思う？」

「度胸つてさ、自信にある程度比例するんだよ」

「それはたぶん、そうだね」

そう言ったタイミングで、シーちゃんは視線を斜め上に向け、少し思案しているような、何かを思い出して笑うような顔をする。

「ハハ。イイ話を一つしておこう。これは、ある音楽家の話だ。まあ、小馬鹿にするつもりはないんだが、興味深い事例だね」

一瞬笑ったのを咳払いで諫めるようにしつつ、シーちゃんは言う。

「その音楽家は、国民的な人気作品を手掛け、その人らしい個性的で特徴のある作風も認知されているようないわゆる『一流』だ。聞くところによると、金としても普通の会社員では逆立ちしても届かないような大金を稼いでいる。ちよつとした富豪と違っていいだろう。実力、名声、金、大勢の人が求めるそうだったものを一通り手に入れたその音楽家が唯一手に入れないもの、それが『自信』だった」

「……………」

「アタシは、自信ってのは自分の積み上げてきた成果で根拠が溜まっていくものなんだと思っていた。しかし、その理屈をその人物は真つ向から否定してきたわけだよ。大御所と呼ばれ誰もが愛するその巨人は、いつも自分が注目されないことを恐れ、いかに自分が素晴らしいかを無意識レベルでアピールしてしまう。その人物をファンは絶賛するが、近い距離にいる関係者や同業者は高確率でアレな人だと評価する。その音楽家からすると最悪だよな、身近にいる人間の評価が一番目に入るんだから。その評価への枯渇が、その音楽家をさらに激しく突き動かす。そしてさらに大金を生む名曲を生み出す」

「そんなことあるんだ……?」

「アタシが何を言いたいかわかるか? 自信つてのは残念ながら、半分以上は生まれつきのことだ。積み上げた成果で手に入る自信もあるが、一番根本的な楽観性・本質的な自信ってやつは手に入らない。それはもう、そういうもんだと思っていいとアタシは思う」

「なるほど……」

「その事例を踏まえて、自分はこういうタイプかを自覚するところからだよな、大事なのは。どっちの方が良いって話じゃねえんだぜこれは。たとえばアタシみたいにぶつ壊れて自信のあるタイプは、実力も根拠もねえのに自信だけあるマジでクソな痛いヤツになる可能性だつて普通にある。実際そういうやつも大勢いる」

ガチャンと音を立てながら、シーちゃんはヤカンを持ち上げ、もう一杯お茶を注ぐ。

「アタシのやり方はアタシの性格ありきだ。だから、アタシの話は参考になるように参考にならないだろう。ジュンちゃんにはジュンちゃんらしいやり方が必ずある。肝心なのは自覚だ。自分ほどのタイプに生まれたのか。憧れで目を曇らせて『自分はこのタイプに違いない』と思いたがってしまうこともあったりするが、それも含めて真摯に自分を見抜く、向き合う覚悟。……大体的場合な、実際の自分は憧れた自分とはズレてるものだ。だからそれを認めたくない。認めたくないから、ズレた姿勢で頑張り続けようとしてしまう。そしてそれは、周りから見れば滑稽なくらいバレバレだったりする。……度胸のない人間が、一度だけ發揮すべき度



胸、それは――」

シーちゃんはお茶を飲み干して、「忘れてはいけないことだぞ」と無言でつけくわえるように私を見ながら言う。

「――弱い自分を認める度胸を持つことだ」

「……なるほどね」

「これひとつ。大事なものはこれひとつでいい。この扉を開ける鍵さえあれば、その先に進める。ラクな道じゃないのは間違いないが、歩くという選択が出来るようになる。もつとも、アタシはジュンちゃんを度胸のない人間だとは思わないけどな。相対的に見ればジュンちゃんは度胸のある方だよ」

「そうかな。シーちゃんと比べると、なんだかそんな感じじゃないんだけど」

「アタシを比較に出すのはやめた方がいいな。特にこれからは。アタシつぽくなってるうとすんなよ。作詞家になるんだろ？もしジュンちゃんがアタシつぽいのを目指したら、一生ジュンちゃんはアタシの劣化版だぜ？今日、いま、この瞬間から、ジュンちゃんはジュンちゃんを目指せよ。誰かの偽物になんてなっちゃダメだ」

「……うん。そうだね。その通りだと思う」

シーちゃんのゆつたりとした微笑みは優しく、ポンと投げ渡すミカンは美味しい。私はシー

ちゃんがいった言葉を頭の中で咀嚼し、ミカンと共に飲み込む。

「そうだジュンちゃん！ お前レースゲームって得意か！？」

「え、レースゲーム？」

「最近ハマってたんだ。でもなんかタイムが縮まないようになってきてさあ。得意だったらなんかコツとか教えてくれよ！ バイク屋の娘ならわかるだろ！？」

「まあ、現実のバイクとレースゲームじゃ全然違うけど……レースゲームは私……ハッキリ言って超上手いぜ？」

「だろ！？ よっしややろうぜ！ どうせ今日は学校サボってたし、夜まで遊んでけよ！」

「言っとくけど付度なしでブツ潰すからなシーちゃん？」

「ふはは！ やれるもんならやってみやがれ！」

「やば。生まれて初めてシーちゃんに勝てるわコレ」

「言うじゃねえか。アタシがジュンちゃんに負けるなんて想像も出来ねえな？」

*く*く*く*く*く*く*

うつかりシーちゃんに勝つたりするもんじゃないな。こうなってしまうと、今度はシーちゃんが私に勝つまでこのゲームは終わらないようだった。手抜きしたら蹴りが飛んでくるし。

……一晩中遊んで、まだ外が真つ暗な朝。グダグダにコタツで寝ているシーちゃんを起こさないように私は部屋を出る。

「うー寒」

バイクのエンジンをスタートさせ、そろつと出す。その時——カチン、カチンという聴き慣れない乾いた音が、玄関の方から聴こえた。

「……いや、江戸時代かよシーちゃん」

起きてきたシーちゃんが、よく時代劇とかで門出にやる火打ち石で、カチカチと小さな火花を光らせている。たしかこれは、厄除けのおまじないだね。そんなのが玄関に置いてあるとは、さすが伊佐坂家。……ドテラを羽織りつつ眠そうなシーちゃんに、私は別れの挨拶を告げる。

「10年後にまた会おう！ 心の友よ！」

10年後なんて、まるで一生の別れみたいだ。けどもしかしたら案外、10年つてそんなに遠くないのかもね。大人達はそう言うし。……いまの私達には、1年でもこんなに長くて、寂しいのね。

——次会ったとき私は、作詞家になっているのかな。どうなんだろう。まあ、どうなったとしても、シーちゃんに胸を張れる自分でありたいものだ。